

## 多胎育児の社会的困難：母親へのインタビュー調査から

越智 祐子\* 横田 恵子\*\*

### A Qualitative Study of Social Difficulties in Multiple Birth Childcare

OCHI Yuko\* YOKOTA Keiko\*\*

#### Abstract

In modern Japanese society, multiple pregnancies are not ordinary, but neither are they rare. Various difficulties exist in multiple births. The findings of previous studies have revealed that the difficulties in multiple births include physical, economic, and psychological problems. In this paper, we will discuss the “social difficulties” experienced in multiple birth childcare. “Social difficulties” is a concept proposed in this paper and includes the difficulties in social relationships. For instance, in the case of multiple birth childcare, the mother-child relationship becomes complex. Although a single birth creates a dyad, the mother-child relationship in the case of twins is a triad. There is a qualitative difference in the management of the relationship between dyads and triads.

Findings from a series of interviews with the mothers of twins reveal that they experience a feeling of strangeness and are unable to describe it. This feeling originates in “social difficulties,” which themselves are created in the mother-child relationship in multiple births; in such cases, the relationship is not that of a dyad, but the mothers assume that a single birth’s standard can be applied. We expect social difficulties to decline if those who look after twins follow the standards of multiple births, and if society rids itself of its prejudices toward minorities.

**キーワード：**社会的困難、多胎育児、三者関係、違和感

**Key words:** social difficulty, multiple birth childcare, triad, feeling of strangeness

---

\*同志社女子大学現代社会学部社会システム学科助教

\*\*本学文学部総合文化学科教授

連絡先：越智祐子 〒610-0395 京田辺市興戸 同志社女子大学現代社会学部  
ochiyuko@gmail.com

## 1. はじめに

ふたごベビーカーをまちで見かけると「かわいい」と単純に笑みがこぼれる。一方で、多胎育児サークル参加者に話を聞くと、一様に「大変さは単純に2倍ではない、2の二乗なのだ(つまり4倍)」だという。ではその大変さをもっと詳しく教えてほしい、と尋ねると今度はみな「うまく言えない」という。多胎育児サークルについては、当事者同士わかりあえる場所として語られていた。本稿では、この「単純に倍というわけではなく、うまく言語表現できないがなにか単胎育児とは違う大変さがある」と当事者たちが感じている多胎育児について、「社会的困難」に注目して特徴を探ることとしたい。

## 2. 研究の背景

まず、本稿で取り上げる多胎育児の特徴、なかでも困難について、先行する研究が明らかにしてきた事項を確認する。多胎育児の前提には多胎妊娠・出産があるが、これらについても基本的な事項を紹介する。その後、本研究が着目する「社会的困難」について検討をおこなう。

### 2.1 多胎妊娠・出産の概要

大木秀一(2010)によれば、多胎出産率<sup>(注1)</sup>は平成20年に、単胎・多胎あわせた全出産1000に対して10.3であった。「お母さん」が100人いたら、そのうちのひとは多胎児の母である計算だ。別の言い方をすると、毎年生まれてくる赤ちゃんの2%はふたご等の多胎児である(大木 2010)。決して多数派ではないが、希有な存在とまでは言えない。

日本の場合、自然の妊娠では、出産1000に対して6人がふたごなので、10.3は比較して高い数字であるといえる。一定であった多胎出産率が増加に転じたのは1970年代である(大木 2010)。多胎出産の増加は、不妊治療、なかでも生殖補助医療技術の発展の影響を受けている。一方で、多胎妊娠は医学的にリスクの高い妊娠であり、避ける努力がおこなわれている<sup>(注2)</sup>。多胎妊娠・出産の医学的リスクとは、単胎と比較して周産期死亡率が高く、早産、低体重児の出産、早期新生児死亡が多い等である(梶原 2009)。研究報告では、これらのリスクをいかに低減あるいは管理できるか、という関心によるものが多い。

リスクを避ける努力と生殖補助医療のさらなる技術発展に伴って、不妊治療の影響による多胎妊娠は今後、増加の一途をたどるのではなく、一定程度に収束することになるだろう。不妊治療を受ける人や高齢出産の増加を受けて、今後の日本社会における多胎妊娠・出産は、絶対数はそう多くはないものの、妊娠・出産の一つの形として定着していくことが予想される。わたしたちは、稀有なものとしてのみ多胎妊娠を扱うことを越えて、社会に少なからずありうる妊娠・出産の形態として、これらをとらえていく必要がある。

### 2.2 多胎育児の困難性の検討

前項でみたように、多胎妊娠・出産は医学的にハイリスクであるため、母子の健康管理は研究上および、実践上の大きな関心となっている。医学的関心にしたがえば、母子それぞれの健

康が単胎の母子と同程度に維持できれば、多胎であるがゆえの困難性は解消されるはずである。このことは、母子保健施策が、産後に多胎そのものを対象にしておらず、低体重や発達障害等の個々の子どもの課題を対象にするところからも理解できる。しかし実際には、多胎育児の最大の特徴は当然「同じ月年齢の子どもが複数いる」ことであり、このことに起因する負担の重さという困難性が存在する。以下で、多胎育児の困難性に関する先行研究を概観し、既知の困難性に加えて「社会的困難」概念を提案して検討する。

まず、心理的負担ならびに身体的負担について述べる。武藤葉子ほか（2010）は、乳幼児期のふたごやみつごを持つ母親の育児負担感について、質問紙調査を用いて検討している。「育児で大変だった内容」の自由記述をみると、「同時に泣く」「睡眠がとれない(交互に起きる)」といった、多胎育児の特徴が並んでいる。これらは手が足りない、体力が続かない、大変すぎて覚えていないといった、心身の負担である。

服部律子（2007a）は単胎育児者との比較において、多胎育児者の心理的負担感が高いことを明らかにしている。また、多胎育児者は不妊治療を経験している場合が少なくないことを指摘し、治療の負担だけでなく、出産後に治療について配慮のない質問を受ける経験を持つ人も少なくないという（服部 2007b）。同時に、多胎育児者の負担感について、経産婦では年上のきょうだいへの対応が特徴的であるのに対し、初産婦では具体的な育児方法に詳しくないことから負担感を感じると指摘している（服部 2007b）。

次に経済的負担であるが、経済的負担が単胎育児に比較して増大することは容易に推測される。双生児を育てる母親の生活実態について質問紙調査を実施した尾前沙織ほか（2005）は、双生児の出生によって経済的負担を感じている対象者は82.8%であったと報告している。では客観的には、どの程度費用は増大するのだろうか。医療費については、双胎で単胎の4倍、品胎で9倍の試算とする報告が紹介されている（大木 2008）。子どもの数倍の増加ではなく、べき乗での増加となるのである。

さらに尾前ほか（2005）は、多胎育児に関する情報が十分に流通しておらず、多胎育児者は育児について大きな不安を持っていることを指摘している。2人以上の子どもにできれば同時に授乳したいが、どうすればうまくいくのか。ひとりでどうやってふたり以上の乳児を入浴させればよいのか。これらは、多く流通している「ひとりの乳児に対する育児技術」とは異なるものである。多胎育児に関する技術は、一般的な育児書にはあまり掲載されておらず、すでに始まってしまっている育児の中で、技術情報をもあわせて収集する必要がある。また、育児に関するさまざまな情報は、育児書からだけでなく身近な友人からも得られる。このことから、尾前ほか（2005）は、多胎育児においては友人の果たす役割が単胎に比べて大きくなると推測している。この場合の友人には、当然同じ経験をした多胎育児者が期待される。

以上の多胎育児の困難性に関する先行研究からわかることは、次の4点である。すなわち、①同一の内容を要求するケア対象が複数存在することによる、身体的負担、心理的負担や経済的負担が重いこと、②同一内容ではあるが要求のタイミングは必ずしも同時ではなく、効率よくケアを提供することが難しいこと、③②にもかかわらず、多胎育児に特化した技術情報の流通が不十分で負担感があること、④ケア対象の数の増加と負担の増加の関係は、単純に正比例

ではないこと、である。

### 2.3 セルフヘルプ活動の展開が示唆する「質的な相違」

このような特徴に対して育児支援政策はどのように対応しているのだろうか。日本の多胎育児支援の現状は、行政による積極的な支援が存在するというよりはむしろ、当事者による育児支援にゆだねられている。具体的には、当事者による育児サークル活動とネットワーキングおよび、アウトリーチによる妊娠期からの早期介入である。これらの活動を通じて、相談や多胎育児技術の伝達等がおこなわれ、共感と支援が提供されている。

現行の母子保健および子育て支援政策は、「多胎育児者」を直接的な支援対象として想定していない。母子保健は、子どもが未熟児であったり発達に遅れがみられたり、被虐待の傾向を発見すれば介入する。しかし、多胎育児そのものを対象とした支援メニューは、育児サークル活動に対して一部で展開されている、当事者活動支援をのぞいてはほぼ存在しない。母子いずれかの心身に顕著な特徴が発見されない場合、多胎育児は単に、子どもが複数存在する育児に過ぎないと考えられている。このとき、多胎と単胎の違いは単に数量の問題とみなされている。この視点は一般的にも広く受け入れられており、「年子よりましですよ」あるいは、「子育てが一度にすんでいいですね」といった慰めやはげましとして、多胎育児者によって経験される<sup>(注3)</sup>。

しかし、多胎育児経験者たちはこの決めつけに納得していない。自身の経験から、多胎育児には支援が必要であると確信しており、セルフヘルプ活動を展開しているのである。セルフヘルプとは、同じ悲しみや苦しみを知る人々によっておこなわれる支えあいである。2010年2月に発足した日本多胎支援協会<sup>(注4)</sup>の前身である多胎育児サポートネットワークは、2006年度から2008年度までの3年間、独立行政法人福祉医療機構の助成を得て「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業<sup>(注5)</sup>」を展開した。そのなかにピアサポート活動モデル事業がある。ここでいうピアサポート活動とは、「多胎育児経験者による、妊娠中からの、家庭訪問支援（多胎育児サポートネットワーク 2007：43）」である。具体的に作業を手伝うこともあるが、傾聴を重要視している。第2年次の報告書では、「双子ならではの悩みをわかってもらえた（多胎育児サポートネットワーク 2007：87）」等、ピアサポートの利用者の意見が紹介されている。以上のことから多胎育児者および経験者は、多胎育児と単胎育児には量的な違いだけでなく質的な相違がある、と考えていることが推測できる。さらに、その相違は一般に理解されていない、とも考えられている。では、多胎育児と単胎育児との間の質的な違いとは、どのようなことなのだろうか。

### 2.4 社会的困難—母子関係のマネジメントをめぐって—

先行研究では「同じ月年齢の乳幼児が複数いる」ことによる、多胎育児者の経済的・身体的・心理的負担の重さが指摘されている。一方、多胎育児における社会関係による負担感は、これまで注目されてこなかった。とくに、「同じ月年齢の子どもが複数いる」ことによる母子関係の複雑さや、1対1の2者関係でない関係をマネジメントすることの労力は、見逃されてきたといってよい。ここでは、多胎育児における母子関係に注目して、その特徴をバランス理論(Heider 1958=1978)を用いて検討する。

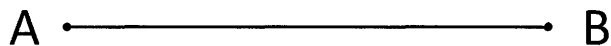


図1 2者関係

社会ネットワーク論では、人や集団の関係の構造を記述するのにグラフを用いる。グラフとは、グラフ理論<sup>(注6)</sup>で用いられる記述法で、ノードとエッジによる最も単純な2者関係（ダイアド）の表現は、図1になる。このとき、グラフは無向グラフとして扱う。これは、好意も悪意も一方通行ではなく双方向に成立すると仮定することに等しい。母子関係ではこれは、単胎育児における母子関係であると考えられることができる。

図1で、直線の有無は関係の有無を表現し、点AおよびBは単胎育児の場合、母親および子どもである。ダイアドにおいて直線は1本のみ引け、2者関係は完結する。もちろん関係といってもさまざまな関係がある。ここではごく大雑把に、ケアを媒介とした愛着関係として把握しておく。ダイアドにおいて母親Aは、子どもBとの1対の関係のみ、つまり自分から発して子どもに向かうまなざしおよび、子どもから発して自分にやってくるまなざしについて考慮すればよい。意味内容は複雑であろうとも、構造的には点が2つ、線が1つの単純なものである。ところが3者関係（トライアド）では、ひとつのノードから直接引くことが可能な線は2本になる（図2）。母子関係に即して言えば、2対の母子関係と、1対の子ども同士の関係である。つまり、多胎育児における母子関係は2倍の母子関係ではなく、子ども同士の関係という、母子関係とは質の異なる関係性を含む3倍の関係性のマネジメントである。先にみた経済的負担の場合は、ふたごで単胎の4倍負担であったが、関係性の場合は、量的には3倍になるということができよう。また、質的には、母子一対の関係とは異なる「子ども同士の関係」の存在が、母親の負担感に影響していると考えられる。これが、本研究の仮説である。

Heider (1958=1978) は、トライアドにおけるバランス理論を提唱している。Heider (1958=1978) によれば、トライアドを構成する二者関係3対の内容に好意（+）と嫌悪（-）があるとすると、トライアドが安定するのは、二者関係3対の積がプラスになるときである。図3に示すとおり、トライアドがバランスのよい状態になるのは、3者とも好意的な関係（+）を保っている場合（①）か、ひとりだけが他のふたりから好意を示されずのけ者（-）になっている場合（③）である。逆に不安定になるのは、②、④の場合であり、特に②は「禁じられた

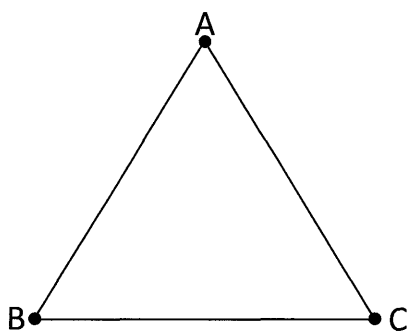


図2 3者関係

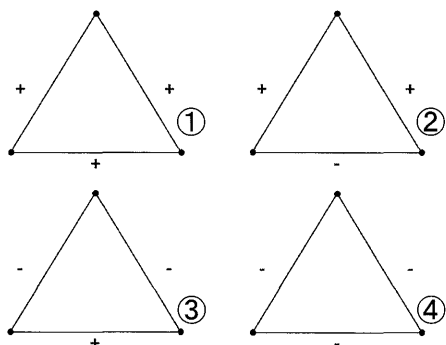


図3 バランス状態

三角形」(安田 1997)と言われる。

母親は関係の構成メンバーであるだけでなく、関係を積極的にマネジメントする者である。母親は、子どもが今何を欲しているのか気にかけて、適切なケアを提供しようと努力する。片方の子もだけをのけ者にすることで3者関係を安定させるわけにはいかず、双方の子もから自分が受け入れられない立場に身を置くわけにもいかない。選択できるのは「両方の子ともと良好な関係を保ち、かつ子ども同士の関係を安定させる」パターンのみである。2者関係に比べると、3者関係のマネジメントはかなり複雑だと言えよう。子どもが複数いても子ども同士に年齢差がある場合は、年長の子にもききわけを期待したり、「おにいちゃんだから先に」といった具合に、年齢の差を所与の秩序として読み替えることができる。多胎育児の場合は年齢差を秩序に読み替えることはできないため、公平な対応への鋭敏な感覚を必要とする。多胎育児者は、このマネジメントを具体的なケア行為と同時にこなしていることになる。かなり困難なことではないだろうか。これは対人関係をめぐる困難であるから、「社会的困難」と呼ぶことにする。

本研究では、単胎育児と多胎育児との質的な相違のひとつは母子関係の相違にあり、多胎育児の困難には「社会的困難」が含まれているのではないかと、という問いに、当事者の語りから答えていく。

### 3. 方法

多胎育児の社会的困難について多胎育児者の主観から探るため、インタビュー調査を実施した。インタビューは、半構造化面接法でおこなわれた。インタビューおよびデータ作成を担当したのは、2008年度神戸女学院大学文学部科目「社会調査基礎演習」ならびに「社会調査実習」受講生から構成される調査チームである。以下に詳細を述べる。

#### 3.1 対象および調査時期

インタビューは、A市内の多胎育児サークル参加者を対象として実施した。多胎育児サークルは、月に1回、2時間程度開催されている。インタビューに協力してくれたのは、就園前の多胎児を養育している母親22名である。インタビュー調査は、2008年の7月～9月に日ごろのサークル活動の拠点場所を使っておこなわれた。インタビューは、3人ひと組のチームでおこなわれ、ひとりが主に質問を担当し、もうひとりは主に記録を担当し、最後のひとりは子どもの遊び相手を担当した。

#### 3.2 主な質問項目

協力者の家族構成や年齢などの属性および、妊娠から現在に至るまでの経緯、育児中に感じる喜びやつらさについて等を尋ねた。

#### 3.3 手続き

インタビュー記録は、協力者の了承を得てICレコーダに録音した。後日音声データからテキストデータを作成し、協力者本人に確認を依頼した。本人の了承を得て、最終的に逐語録としてまとめた。次にその逐語録を用いて定性的コーディングをおこない、概念の生成作業をおこなった。

## 4. 結果

インタビュー調査の結果、妊娠から出産に至るときに過酷な経験や、さらに続く記憶がないというほどの0歳児の壮絶な育児体験が浮かび上がってきた。また、母子関係の複雑さが、多胎育児の困難さの要因として挙げられていた。以下に、結果を示す。

### 4.1 協力者の基本的属性

インタビュー協力者の平均年齢は34.8(±3.1)歳であった。家族構成は、協力者全員が配偶者と子どもからなる核家族であった。子ども数は、3人以上いるのは3人で、2回目の出産が多胎出産だった。また、全員がふたごの母である。ふたごの平均年齢は、2.1歳であった。その他の項目としては、不妊治療経験についてインタビュー中ふれた人は6人おり、管理入院の経験についてインタビュー中ふれた人は9人いた。経験を持っていても口にしない人もいることを考慮すると、この人数が経験者の最低人数とみなせる。

### 4.2 小さく産んでしまった

多胎育児者たちの出産体験は、単胎児の出産体験とは違っていることがある。具体的には、早期に生まれる危険性が高いことや、それを避けるために管理入院をおこなう場合が多いことなどである。このため多胎育児者たちは出産後、複雑な感情を抱くことがある。

普通赤ちゃんって赤いじゃないですか、でももううち(引用者注:貧血で)真っ白だったんですよ、生まれたときから。だからちょっと不安でした。やっぱり。やっぱりふたごだからちょっと小さめだし、だから他の子と比べると、貧弱だから…(Hさん)

未熟児やったんやんね、で、1700くらいしかなかったんやけど、重たいなって思った。すごい重みを感じたんよね(Mさん)

すごいちっちゃいなーと思いましたね。うーん、そのときは、何でしょうかね、緊張でしたね。(Pさん)

妊娠期には、早産にならないようにがんばりましょう、と医療者から励まされる。努力の結果、早めの出産になった場合、ときにそれは、「生んだわたしの責任」として自らを責める方向のちからを持つ。

(引用者注:早産だったので)もう…、私は殺したと思ってしまって、本当に、何だろう…、すごい泣いて、わからなくなるほど泣いてたんだけど。…もう手術台に寝た時に、あっ、この子たちが死んだら私も死のうと思ったら、スーッと涙がひいて…(後略)(Aさん)

保育器やNICUに入る場合もあり、産まれてすぐに赤ちゃんを抱けるとは限らない。母親だけが退院し、病院へ通うことも少なくない。

保育器にはいっちゃったんで…(前略)…生まれてすぐっていう感じとかがあんまりなかった、か

な (Bさん)

ふたごが両方とも、保育器や NICU に入るばかりではなく、母親と片方の新生児だけが一足先に退院するケースもある。以上のように多胎出産では、単胎出産のようすと異なっている場合がある。

#### 4.3 0歳児養育中の断片的な記憶

多胎育児者の身体的な困難は先行研究に示されているとおりであり、その苛酷さは思い出せない、言語化できないものである。本当に大変なことやつらい経験は、必ずしもことばで表現されるわけではない。

もう昨日のことから忘れています。すごく大変やったってことは覚えてるんですけど (Dさん)

ほんとに聞かれても、細かいこと聞かれても、あんまり思い出せないんですね… (中略) …その日暮らしやから、その日、その日、精一杯なんで (Pさん)

もう、なんかね、時間だけが過ぎていって感じ。覚えてない (Sさん)

#### 4.4 外出の困難さ

同様に、ふたごを連れての外出が非常に困難であると語られた。ケア対象が複数で、異なるタイミングで同じケアを必要とするために「なかなかうまくいかない」と感じられる。

2人一緒に出かけるのがすごい大変だったんです。1人はお腹もうちょっとで空きそうやし、ああんかもう寝てるし、みたいな感じで、全然なかなかまいこと出れなかった (Rさん)

一人やったらベビーカー押して、泣いたら抱っこできるじゃないですか。でも、二人泣いたらどうするー？みたいな。あたしはその点が結構ビクビクしてました (Pさん)

エレベーターもない4階なんですね、降りんのどうしようみたいなまず、登るんもどうしようみたいな。そうなんです、なんかこう二人持って降りんの、歩けない子を二人降りるって危険じゃないですかあ、重たいし。だから10ヶ月くらいなってちょっと体がしっかりしてから後ろにおんぶ紐して、前にスリングっていうこう抱っこできるやつして (Pさん)

坂の上に住んでるんで、ふたごのベビーカーだと坂の上にあがれない (Iさん)

外出時には、ふたごを連れてるといろんな人から話しかけてもらえる体験もある一方で、無言の圧力を感じることもある。

まあちっちゃい時は、(引用者注：ふたご用ベビーカーで電車に乗るとき) 板張ってもらってたんですけどね、やっぱり嫌あ～な顔されるんですよ (Dさん)

#### 4.5 親ペースになる

多胎育児は子どもに待ってもらおう育児方法を採用している。このことは「親ペース」「親中心」と表現され、単胎育児の「子どもペース」「子ども中心」と対比して語られる。



結構あたしは放任かもしれないです。二人を同時にだっこもできないし、まあ、首が座ってないときなんか特に、交替交替じゃないと抱っこできない。一人だと泣いたらすつと抱っこできるし、親子のコミュニケーションもすぐとれると思うんですけど、もう、順番ね、順番ねってなるから、二人が待つようになります (Aさん)

自分のペースに赤ちゃんを持ってこようと思ったんで、泣いてなくても、一人がミルク終わったらもう一人も無理やりミルク飲ませたりとか。(Mさん)

両方泣くときもあれば、片方だけのときもあるし、そこにお兄ちゃんも加われば、もう、とてもじゃないけど、手が足りないの。ある程度放っておく (Kさん)

早い時期からもう持つように仕込んだんで、4ヶ月くらいから自分で持って飲ませてました (Oさん)

(引用者注：単胎の場合は) どこ行くにしてもその子中心で、機嫌よくなったから、パツといたりできるし (Rさん)

また、単胎育児の方法が、多胎育児においても「基準」として受け止められており、基準を満たすことができない引け目を、子どもに対しても単胎育児者に対しても感じる場合がある。

(単胎の母の) お友だちができるんですけど、結構、子どものペースで、こうおっぱいが飲みたければあげる、っていう子どものペースで動いてる。単胎のお母さんは子ども優先でできる (Sさん)

今思えば、単胎のお母さんには、例えばおっぱいの時間をきっちり決めてることは言えなかったですね。余りにも親ペースで動いてるって感じがして、言えなかった (Sさん)

#### 4.6 平等への配慮

多胎育児の母子関係は3者関係であり、2者関係とは異なっている。今回の結果からは、関係をマネジメントしようと苦戦している養育者の姿が浮かんできた。鍵になるのはふたりの子どもをどのように「平等」に扱うかということであった。多胎育児者は、「きょうだい」概念を使った安易な順位付けに強く反発する。

ああゆう差別 (引用者注：ふたご間できょうだい扱いをすること) はつけないようにしてるんですけど…。でも結構ケンカが激しいので…どっちを怒っていいのか困るんですけど、でも…まあ平等に怒って (Hさん)

やっぱり平等っていうのがすごい気を使いますね。こう、二人が「相手のほうが可愛いんじゃないか」とか思わないように (Nさん)

自分の中では区別しない、ようにはしてますね。平等にとは思ってます。どっちがお兄ちゃんって言われるのは嫌ですね。悪気はないと思いますけど (Pさん)

みんなこう、おんなじ、なるべくおんなじってこう、思おうとしてる人が多いと思うんですよ。うん、で、わたしもそうですね… (Sさん)

#### 4.7 何か違う

多胎育児者は、単胎育児者を自分と同じ生活課題を持つ者としての共感というよりはむしろ、「何か違う」と違和感を感じており、理解されていないと感じている。

一人を育ててらっしゃるサークルに行くと、どうしてもわかってもらえないこととか、すごく気を使ってしまう (Aさん)

ちょっと感覚が、なんか違うんですね、何が違うって言われても、わからないんですけど (Pさん)

(引用者注：単胎育児者とは)話しても、どうしても何か合わないなっていうのが…合わないじゃないんじゃないんですけど、やっぱり違うな (Rさん)

#### 4.8 気を遣う

何か違う、という違和感は、孤立感や、周囲から自分たちがどう思われているだろうかという懸念につながる。単胎育児者と同じようにふるまうことができないことで、「気を遣う」。

単胎のお母さんにはこれは言えないとか、こう、結構分けてた、自分の中で (Sさん)

公園とかに遊ばせにいても、1人の子のお母さんは1人の子を見てたらいいから、こう話が出るんですよ、他のお母さんと。でも2人の子を見てないと…その話している場合ではないですよ。1人の子を見てたら1人の子はどっかいっちゃうしで話がなかなか出来なかったりとかで。何か寂しい感じがする (Nさん)

児童館に行ったりとかした時に、他のお母さんとかが結構気を使ってくれるんですけど。なんか、そういう時に、ああ、ちょっとなんか迷惑かけてるなって思います (Cさん)

児童館とか行くと大概みんな1人だから、あの、私みたいにバタバタ走り回ってる人ってあんまなくて。2人いるとワーって別々に行くから、すごいバタバタバタバタ私も走り回ったり。すごい、気を遣うって言ったらおかしいけど、他のお母さんとか子どもさんとかにもすごい気を遣っちゃって (Fさん)

1人の子もだと、何か嫌なことがあったり機嫌が悪かったりだとかで泣くことがありますよね。で、泣いて終われば次は静かじゃないですか。でもふたごなので、1人泣いて終わっても次が泣くと、けっこうずっと泣いてる状態が続くんですよ。ずっとうるさい状態が。たぶん近所とかでも「ずっとあそこの家泣いてるわ。」とか思われると思うんですけど、ずっとそんな状態ですよ (Jさん)

泣かしたと思ったらいいやんていう気持ちもあるんですけど、でも、やっぱり周りの目が気になるじゃないですか、泣いてるのに一みたいな、抱っこしてあげればいいのにみたいな、感じになるから、結構引きこもってました10ヶ月くらいまで、あたしは (Pさん)

### 5. 考察

インタビューの結果から、「小さく産んでしまった」「0歳児養育中の断片的な記憶」「外出の困難さ」「親ベースになる」「平等への配慮」「なんか違う」「気を遣う」というカテゴリーを生成した。このうち、「親ベースになる」「平等への配慮」「なんか違う」「気を遣う」の3つの

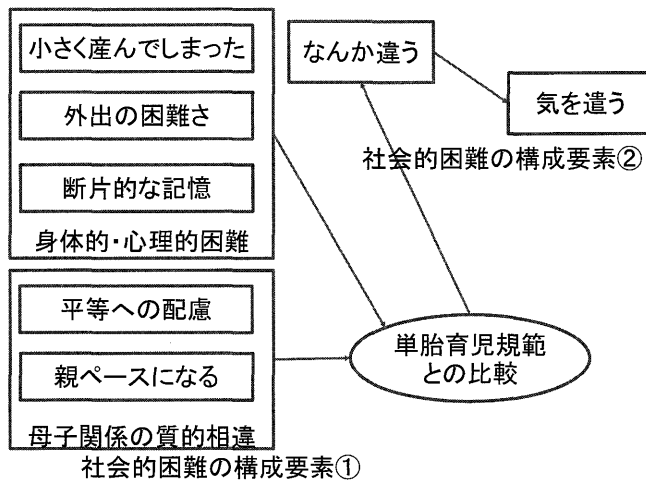


図4 概念の関連

カテゴリーは、社会的困難と関連があると考えられる（図4）。以下、考察をおこなう。

結果のうち、「0歳児養育中の断片的な記憶」「外出の困難さ」のカテゴリーは、先行研究で指摘されている身体的困難の記憶である。加えて「小さく産んでしまった」という、多胎妊娠・出産過程で養育者が感じる心理的困難が示された。多胎妊娠から出産に至る過程は、医学的に「ハイリスク」である点で特徴的である。しかしそこを通りぬけた後は、医療保健関係者からの注目度は下がる。一方では過酷な日常生活が待っている。このような経験は、多胎育児者から「何か違う」という違和感とともに受けとめられている。ピアサポートが妊娠期から関わりを始めるのは、妊娠、出産から育児の開始にいたる多胎育児イメージを、先輩の姿を見せることで肉付けしていると考えられる。

当事者同士が強く共感しあう一方で、マジョリティである単胎育児者に対しては「何か違う」「気を遣う」と感じている。「親ペースになる」ことは、多胎育児に適した方法であるが、単胎育児法とは異なっており、多胎育児者は、子どもペースでケアできないことに引け目を感じている。本来、多胎育児には適した方法があり、単胎育児と異なっていて当然であるが、引け目を感じるというのは、知らずのうちに多胎育児者が、単胎育児規範を内面化しているためであろう。それで、「迷惑をかけてしまう」と気を遣ったり、単胎育児者から否定的な感情もたれているのではないかと考えてしまうのである。また、子どもに「平等への配慮」をおこなっていた。3者関係である多胎母子関係のバランスを安定させるための行動であると考えられる。単胎育児と多胎育児とでは母子関係が質的に異なっており、子ども同士の関係にも気を配る必要がある。

つまり、多胎育児における社会的困難とは、ひとつには母子関係がダイアドではなくトライアドであることに起因する社会関係の複雑さのマネジメントの必要性であり、さらには単胎育児における基準や規範が多胎育児者にもそのまま内面化されていることである。したがって、「ピアサポート」とは、単に事情をよく知る人による共感サービスではなく、育児規範の相対化に他ならない。初めて来た参加者が、「子どもペースで動いてはって、みんなが『そんなん

してたらお母さん倒れるよー』って言ったら、『へえー』っていうカルチャー・ショック (Sさん)」を受ける場所が多胎育児サークルであり、「ピアサポート」なのである。

以上、多胎育児の社会的困難について考察してきた。この困難はどのようにして解決が可能だろうか。2点提案しておきたい。1点目は、多胎育児者自身による育児規範の相対化である。「わたしたちのやりかた、コツ」を収集し、仲間に伝達する。サークル活動やアウトリーチ活動として展開されているピアサポートは、このための非常に有効な手段である。現在は乳幼児期の身体的ケアに注目されているが、平等とは何か、いかに平等を維持するかという社会関係についての問いは、思春期の育児まで視野に入れて検討すべき課題である。

次いで2点目には、社会による「子ども中心主義」に替わる、育児実践を支える新しい正当性の模索(石黒 2004)である。『子ども・子育て白書』にいう「地域の育児力の向上」は、養育者(多くは母親)が孤立しないための施策である。これは一般に流通している「1対1」の育児関係イメージを相対化し、育児ネットワークのなかに具体的に位置づけていくことであろう。この課題は単胎か多胎かを問わず、現代の日本社会における子育てをめぐる共通課題といつてよい。ここでは、育児関係のネットワーク化を目指す多胎育児支援についてより具体的に検討しておく。

第1に、自宅訪問による早期からのピアサポーターの確保やヘルパー派遣制度の充実が求められる。乳児を育児している多胎育児者にとって外出は非常に困難で、ケア担当が密室の母親に集中しがちである。そこで当事者だけでなく、ヘルパー派遣を通じて多様な社会関係構築の可能性を担保することを提案したい。これは母子保健行政に端的に表れる「問題があるから訪問する」こととは異なる視点による支援である。

第2に、地域の子育て支援拠点における、多胎育児の特徴に関する理解の推進が求められる。多胎育児者が地域の育児ネットワークのなかに居場所を得るためには、支援者が「1対1の育児関係規範」「子ども中心主義規範」を相対化していることが必要である。多胎育児には、単胎育児とは異なるふさわしいやりかたがあることを、支援者は知る必要がある。たとえば多胎育児は「親ベース」になることが当然である。また、「子どもが複数いれば順序があるはず」という先入観からの解放と、「平等」の尊重への配慮が是非必要である。これらはより一般化すれば、マジョリティの規範をマイノリティにそのまま適用できないという原則になる。支援者への研修プログラムのなかに組み込むべき内容だと考える。

第3に、『『あなたの子なんだから』を越えた育児実践』の積み上げである。多胎育児サークルでは、お互いに子どもを見守りあう文化がある。

2人が「お母さん」とかって泣いても、(引用者注：多胎育児サークルの人って)みんなふたごやから、適当に誰かが抱っこしてくれるやろうとか、その甘えがあつて。…(中略)…「あなたの子なんだから、あなたがみなさいよ」じゃなくて…(中略)…他の人もめんどろみで、あたしも他の子めんどろみするしって(Pさん)

これはまさに、1対1ではない育児関係の構築にかかる先駆的实践ではないだろうか。この、

ふたご育児文化は、地域子育て支援拠点はじめ広く一般で紹介されることが望まれる。

## 6. おわりに

多胎育児者たちは「うまく言えないけど『違和感』」を抱いている。本稿はこの違和感が、1対1でない母子関係や単胎育児規範の内面化といった「社会的困難」に起因することを論じてきた。最後に、今後の課題を確認したい。

本稿では、乳幼児を育てている多胎育児者の主観から社会的困難に接近したが、「平等」については深く検討することができなかった。どのように「平等」を実現するかは複雑な問題であり、より深い観察と考察を必要とする。乳幼児期だけでなく、思春期に至るまでさまざまなかたちで立ち現れる課題である。

また家族内の関係を考えるとき、他の家族メンバー、具体的には父親の介入がきわめて重要となる。近年父親の育児参加への関心が高まっている。単胎育児者よりも多胎育児者である父親のほうが、家事や育児への参加が多いともいわれる。このことは具体的なケア行為の量だけでなく、関係をマネジメントする必要性の面からも分析すべきだと考える。

これらの課題は多胎育児者という少数者に関するものであるととらえるべきではない。構成員が多様になりつつある日本社会においては、これまでの「常識」の持つちからは弱くなっている。「平等」とはなにか、どのように実現可能か、自分と異なる方法を持つ人々とどのように関係を作っていくかといった課題への取り組みは、現代の日本社会に広く資するものだと考える。引き続き検討を重ねたい。

### 注

注1：多胎出生率は、多胎の種類別分娩数（母親の数）／単胎と多胎の全出産数（すべての出生数と死産数の合計）（大木 2010）

注2：2007年に日本生殖医学会は、「多胎妊娠防止のための移植胚数ガイドライン」を策定している。また、日本産科婦人科学会は2008年、「『多胎妊娠』に関する見解改訂について」という会告を出し、「生殖補助医療にともなって発生する多胎妊娠をさらに減少せしめることが急務」だと述べている。

注3：多胎育児支援サークル「マミーベアーズ」は、多胎育児経験者ではないボランティアスタッフへ、注意を促す文書を作成している。その中に、「ふたご育児者が言われて悲しい思いをする可能性のあることば」として、これらの内容が指摘されている。

注4：<http://www.jamba.or.jp/>

注5：<http://www.tatai-ikuji.jp/project.htm>

注6：グラフ理論は数学の一分野であり、有限個の要素からなる集合の二項関係を考察するものである。

### 文献

Heider, Fritz, 1958, *The psychology of interpersonal relations* (=1978, 大橋正夫訳, 『対人関係の心理学』誠信書房.)

服部律子, 2007, 「双子の母親の精神健康度に関与する要因の分析」『母性衛生』48(1): 142-151.

———, 2007, 「双子の母親の育児不安に影響する要因：不妊治療と育児の実態」『母性衛生』48(1): 38-46.

石黒万里子, 2004, 「『子ども中心主義』のパラドックス」『育児戦略の社会学』世界思想社, 105-133.

- 大木秀一, 2008, 『多胎児家庭支援の地域保健アプローチ』ピネバル出版.
- , 2010, 「多胎児家庭の育児支援に役立つ図と表(2010年作成版)」([http://www.jamba.or.jp/images/assist\\_tataijikatei.pdf](http://www.jamba.or.jp/images/assist_tataijikatei.pdf))
- 尾前沙織・谷尚子・安代晋吾・木下さわ美・中尾雅美・太田小百合・野村公寿, 2006, 「双生児を育てる母親の生活実態の検討」『藍野学院紀要』19, 59-66.
- 多胎育児サポートネットワーク, 2009, 「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業報告書」.
- 安田雪, 1997, 『ネットワーク分析—何が行為を決定するか』新曜社.

## 付記

本稿は、日本社会福祉学会第58回秋季大会（日本福祉大学）での口頭報告を大幅に修正したものである。なおインタビュー調査は、神戸女学院大学文学部科目「社会調査基礎演習」「社会調査実習」で実施したものである。また、本稿執筆にあたり、科研費（22730429）の助成を受けている。協力者ならびに関係者のみなさまに心より感謝します。

（原稿受理 2011年9月16日）